

	<p style="text-align: center;">第 135 号</p> <p>〒733-0032 広島市西区東観音 8-10</p> <p style="text-align: center;">ワールド・フレンドシップ・センター</p> <p>理事長：森下弘 館長：ドン&ポーリン・ヘス</p> <p style="text-align: center;">TEL (082) 503-3191</p> <p style="text-align: center;">FAX (082) 503-3179</p> <p style="text-align: center;">E-Mail wfchiroshima@nifty.com</p> <p style="text-align: center;">URL: wfchiroshima.net</p>
---	---

第二のふるさと ドン&ポーリン・ヘス



ドンとポーリンの送別会

ワールド・フレンドシップ・センターは、この二年間私達にとっての第二の我が家でした。今、さよならを言う時がやって来ましたが”farewell”はいかにもこれっきりの響きがあって使いたくない言葉なので、もう少し良い表現をと探していました。問題を解決してくれたのは英語クラスの生徒、吉村修子さんでした。彼女がこの友愛に寄せた原稿のタイトルが”See You Again”だったのです。これだと私達の別れがうんと肯定的に表現できるので拝借することにしました。

私達が広島にやって来たのは、住み馴れた所を離れて異文化の中で暮らし、平和な日本の特異な平和活動を模索し、WFCのボランティア館長を勤める為でした。多くのプログラムが平和への献身と熱意に満ちたボランティアにより遂行されているこの生きたセンターを私達は後にすることになりますが、離れても皆さんの事は生涯深く私達の心に残るでしょう。

この2年間に学んだこと感じたことを、ほんの幾つかですが以下記してみます。

WFC の40周年記念祝賀、8月6日を通して私達は自国の歴史教科書で読んだこととは違う、本当の広島について学びました。

WFCの前館長たちと会ってから、自分達の責務を広く大きな流れの中で見るようになりました。過去のそして未来の館長らとともに、私達は森下先生の WFC 記念誌に加えられるほんの小さな1章であるに過ぎないのです。

ボランティア館長の出身が、アメリカの異なる地域や異なる職業、年齢もふくめて様々であることは、日本の皆さんに幅広くアメリカ文化を紹介できるという意味で WFC にとっては健全なことです。

WFC は館長ではなくて、平和を涵養し一度に一人ずつ友人を作っていくという理念でバーバラ・レイノルズにより創立された、生きた組織であるという点が肝心なのです。生きているから、WFC の歴史には新たな章がこれからも沢山書き加えられていくのです。

WFC が生きていることはそのパンフレットに載せられた多くのプログラムでも分かります。詳細はここでは省きますので WFC のホームページ上で多彩な活動をご覧下さい。
<http://wfchiroshima.net/>

これらの活動は WFC の平和への強い意志を継続していくという熱意あふれるボランティアにより遂行されているから、センターは生き

ているのです。

センターのゲストはその多くが、広島へ来て極めて大きな影響を受けたと語っていました。広島は、世界各地からの人々が出会い、経験を分かち合い、そして平和を考える時を持つ、そういう所なのです。

理事や生徒の皆さんから、小旅行、コンサート、食事その他行事などにご招待頂き心から感謝しています。そんなご厚意のお陰で、この素晴らしいコミュニティに溶け込むのだという私達の決意は一層強まりました。

館長としての私達のこの2年は、今後続く人達によりどんどん書き加えられていく WFC の歴史の小さな1章に過ぎません。過去1年間の活動から幾つかひろってみます。

WFC に宿泊したゲスト数は 1200 人強でした。700 人を超えるゲストや訪問者が被爆者の話に耳を傾け、その多くが広島での最も感動的な経験だったと語りました。ゲスト他 250 人以上の人々が平和公園内の沢山の碑の説明や意義を、英語で WFC ボランティア・ピースパークガイドから聞きました。

週1回の英語会話6クラスに現在51名の生徒が在籍し、平和、政府、世界情勢など平和に関する様々な話題を話し合っています。

翻訳クラスは月2回で、被爆その他平和関連の日本語素材を英語に翻訳し、被爆者の体験を世界に広く伝える為アメリカのピースセンターへ送ります。フレンドシップアフタヌーンは、海外での平和活動体験を持つゲストスピーカーらを招いて4回開催され、勉強と対話の機会を提供しました。

平和交換使節(PAX)日本人4名は3週間のアメリカ滞在で様々な地方を訪れ、より良い世界を模索して平和を愛する人々との対話を重ね、平和、友情、その架け橋を築くため手を

携えて努力することを讃えました。韓国から PAX チーム6名が WFC を訪れ、個人レベルでの日韓両国間の問題解決について対話を持ちました。

国際協力と友好の日には WFC はブースを構え、年間通しての沢山の WFC の活動を紹介し、他の平和グループとの知己を得る機会を作りました。ペアセロベでは、WFC のテントで歌やゲーム、バザー、パンフレットを置くなどしてセンターを良く知ってもらう為の PR に努めました。

WFC メンバーは、8月6日の平和祈念式典に参加し、その日一日様々なプログラムと共に午後、夜と行事を行いました。WFC は世界中のピースメーカーにもっと知ってもらう為、インターネット上のサイトを整備拡充しました。

送別会では50人以上の参加者から饞別を始め、音楽、寸劇、歓送の言葉など沢山顶戴しました。私達はパワーポイントで、参加させてもらった多彩な行事や活動に焦点を絞ったプレゼンテーションを行いました。私達が特に言いたかったのは、ボランティア館長は来ては去って行きますが WFC は42年間存続してきたこと、それはバーバラ・レイノルズの、平和を涵養し一度に一人ずつ友人をとる理念を受け継いできた長年メンバーである皆さんの献身によるものだということです。有給スタッフわずか1名というこの小さな団体が、かくも広い地域のかくも多くの人々に知られていくことは本当にすごいことです。

最後にもう一つ私達が学んだこと。それは国に持ち帰るものの中で最も大切なのは、WFC での私達の家族とも言える皆さんの友情だということです。それで、去り行く館長としてさようならは言わないことにして、”See you again!”

PAXに参加して

ローレン・サウアー



4月の韓国PAXピースフォーラム

4月6日から9日まで、KACとThe Frontiers(韓国の団体)からWFCへの2007年のPAX(平和使節交換)プログラムの一員として、広島に滞在しました。それは、素晴らしい体験でした。WFCは私たちのために有意義な計画を準備してくださり、平和公園の碑巡り、ピース・フォーラム、平和資料館見学、被爆者の語り部など優れた学習の場を提供してくださいました。茶道、ホーム・ステイ、宮島観光などを通して、日本文化も経験することができました。広島で汚染されていない空気を胸一杯に吸い、桜の花が満開の川べりを散策できたのは、とても心身をさわやかにできました。それまでは、私にとって原爆の惨状を理解することは容易ではありませんでしたが、直接被爆体験を聞き、平和資料館を訪れることによって、原爆によって廃墟と化した広島や人々の惨状を心に思い浮かべることができました。希望と新しい生命の誕生へと想いがしばしばつながるイースターの日に、被爆者の方の個人的な証言を聞き、資料館を訪れることができたのは、とても意義深いものでした。広島は1945年の8月6日に死にましたが、しかしまた復活したのです。

被爆者の話を聞いた時、また平和資料館

見学した時に、たくさんの感情が私の心の中に沸き起こりました。原爆がもたらした死、病气、破壊などが私の気持ちをひどく悲しくさせた一方で、他方では、最後の一人になっても戦い抜くという日本人の極端な意志を感じて、それゆえ完全に同情することができませんでした。しかしまた、原爆投下を持つ深い政治的性質に気づきました。敵である日本人の人間性をまったく無視していたこと、現実には、原爆は都市を破壊するために、また一般市民を傷つけるために製造されたということです。それは明らかに人類に対しての犯罪です。

以前ルワンダとホロコーストの生存者の体験を聞いた時と比べて、今回被爆者の方の体験を聞きながら私が感じた感情的混乱は、ルワンダとホロコーストの生存者は、明らかに罪の無い犠牲者と思えるのに、一方被爆者は、強力で悪質な侵略者の一部でもあり、また同時にその時16歳の中学生で罪の無い犠牲者でもあるということです。神が、「汝の敵を愛せよ」と命じられたのはこのような理由からでしょう。そうすることは、難しく自然にはできないことですが、もし私たちの「敵」の人間性を十分に見ることができなければ、私たち自身の人間性も矮小化されるのではないのでしょうか。この度のユニークな体験や、苦しみと共に美しさをも経験できたバランスのとれた計画を用意してくださったことに、とても感謝しています。



ローレン・サウアーとケビン・リーダーからのお土産

次期館長のご紹介

ドン&ポーリン・ヘス



新館長ケント&サラ・スウィツァー

WFCの新館長として、ケント&サラ・スウィツァー夫妻が5月15日に着任されます。夫妻は、並外れた多くの資格と経歴の持ち主ですからWFCにまた新しい広がりをもたらしてくださいと期待しています。

ケントは、ペンシルバニア州、ニューフリーダム近くの58エーカーの農場で生まれ育ちました。1974年、パーデュー大学を卒業、電気工学とバイオメディカル工学のダブル専攻です。IBM、アメリカン ホスピタル サプライ、クーパービジョンなど、大小の会社に勤め、また彼の二つの会社、バイオメディカル装置事業と現在の会社であるテンパス・テクノロジーで仕事をしてきました。これは、POS のソフトウェア販売と、データの保管や提供を行うデータハウジングの会社です。この会社は20年前の創業で、ここ10年一緒にやってきた甥のジェイソンにこの事業を譲ることにしています。ケントは、写真、サイクリング、旅行、読書、執筆、演劇、スポーツ(特にフットボール)、グループでの討論、地域の奉仕などに興味があります。

サラは、インディアナ州の現在の住居に近いところで育ちました。パーデュー大学では栄

養学を専攻、2001年には公共行政の修士学位を取得しました。この2年間は、彼女が勤務するセンターの居住区域の運営管理に携わってきました。趣味は、園芸、料理、読書、旅行、ウォーキングです。また子供好きでもあり、25年間教会ではしばしば子供のバイブルクラスを担当しました。

1970年代終りには夫妻そろって旅行で日本に来ています。サラは高校卒業前に6週間、北日本でホームステイしました。その時のホストファミリーを、今回の日本滞在中に探しだせればと願っています。二人は最近フォートウェインのIPFWで日本語初級クラスを終了しました。WFCで皆さんに会えるのを楽しみにしておられます。

2007年2月15日広島にて

クリスティーン・マーティン ソブレック

ドイツ、マグデブルグ

来る前から広島という名前は良く知っていました。荒廃した町のイメージを心に描いていたので生き生きとした活気あふれる町を見てとても驚きました。原爆ドームと平和記念資料館はありましたが、他には 60 年前に起こった出来事の痕跡はどこにもありません。その痕跡を見つけるためには、より注意深く見なければいけません。ドンとポーリンは申し分ないホストで、楽しい語り合いを持つことができました。原爆の目撃者である被爆者たちが少なくなっている今日、原爆の記憶を風化させることなく次の世代に歴史から学ぶべきことを継承する新しい方法がますます必要になっています。

平和記念資料館は日米の両方の立場を伝えているうえに、広島と長崎への原爆投下に至った経緯を説明していてとても良かったと思います。戦時中、核の使用はなかったが激し

い爆撃を受けた場所で育ちました。それでも戦争に至った経緯を追求し報復を回避する教育を行うことがいかに大切なことかわかります。ここに(とりわけ、この地に)いることは、本当に貴重な経験になりました。ありがとうございます。そして、お元気で!

Pauline & Don, さようなら!

吉村修子

桜の季節が過ぎ、平和大通りの木々が緑の若葉で輝く頃 SAYONARA の季節も巡ってまいりました。Pauline & Don のこの2年間のWFC への貢献に心よりお礼申し上げます。

初めてフライデークラスでお二人にお会いした時の、Don の思慮深い雰囲気と、Pauline の明るい陽気な口調は今でも、みな心に鮮明に刻まれています。そして個性的なクラスのメンバー達の、無限に広がる興味やトピックスを Don が上手に舵取りして下さって盛り上がったクラスの楽しい時間のことは長い記憶として私たちの記憶に残るでしょう。

更にワシントン D.C. やアメリカの政治、経済、などの広範囲に亘る Don のお話、長年のご自身の職業観を踏まえた平和への希求の心には現実に即した説得力がありました。

ボランティア館長として着任されて間もなく創立40周年記念の集まりがあり、その手助けに引き続いて、館長夫妻としての日々の激務がすぐに始まりました。

そしてセンターに特別な思いを抱きながら宿泊を求めて訪れる世界各国からの多くのゲストに深い感銘を与えて広島メッセージを伝える大きな働きをして下さった日々の実りは、各国から寄せられていたメールにも如実に伺われました。

その大きな一翼を担って下さった Pauline

と Don に心よりの拍手とお礼を申し上げます。フライデークラスの今年の竹原への春の旅の折に、皆で散策した古い町並みの中で心に残った雛人形の柔らかな微笑のように、私達も平和を希求する気持ちをささやかながらもそれぞれに持ち続けたいと思います。そしてそういう気持ちを教えてくださったお二人に心より感謝しております。

佐久間佳子さんの訃報



故佐久間佳子さん

佐久間佳子さんが2月25日に73歳の若さでも膜下出血のため亡くなりました。WFCのメンバーたちは今でも彼女の死を悲しんでいます。教会で心のこもった葬儀が行われ、百人を超える友達と、センターからは約20人が参列しました。前館長たちからもご家族へのお悔やみのメールがたくさん届きました。300通を超える弔電がご家族に渡されました。今でもなおクラスの生徒さんや友達の話から彼女の知らなかった一面に出会うことがあります。木曜日の英会話クラス、翻訳クラス、ピースガイド、友愛委員、ピースセミナーなどを通してセンターに多大な貢献をされ、加えて、東京女子大卒業後、中学および高校で英語の教鞭をとり、また広島YWCAの会長も勤められました。大学教授だったご主人について1年間アメリカにも行かれました。とても謙虚な人

柄で、WFC を始めとし、YWCA、憲法9条の会など多岐にわたる活動をされていたにもかかわらずそのことを知らない人もたくさんいました。彼女は1980年頃からWFCメンバーでした。また「ハート」という英語翻訳グループに所属して「レインボー・ビレッジ」という本の翻訳にもたずさわられました。これはバーバラ・レイノルズが娘のジェシカをモデルに書かれたものです。時がたつとともに、献身的に平和活動にかかわってきたこのやさしいクリスチャンの女性についてまだ知らない多くのことを見つける事になるだろうと思います。

Yeoul 韓国教会への訪問

木戸マサコ



木戸先生と加藤さん親子とPAXチーム

昨年2月4日、Yeoul 韓国教会から8名のグループがワールド・フレンドシップ・センターを訪問した際に、日本文化の一つとして茶道を経験してもらってはと言うことで私宅を訪れました。大人3人、高校生1人、中学生3人、そして小学生1人と色々な年齢層のグループでした。お手伝いをして貰った加藤さんと中学一年生のお嬢さんも加わって、英語、韓国語、日本語が飛び交っての和気藹々の中で二時間余りがあったという間に過ぎました。リーダーのオウ牧師が、来年はあなた方を韓国へ招待しますから是非来てくださいとおっしゃ

いました。昨年11月に連絡が入り、本年1月20日から23日まで加藤さん親子と私の3人でソウルを訪問することになりました。

1月20日午後、広島空港からアジアナ航空で仁川空港へ到着、オウ牧師ともう一人教会のメンバーの出迎えを受け一路ソウル市内へ。景福宮と古宮博物館を見て、韓国料理の夕食を8人でした。その後ソウルの本屋へ行き、日本語の書籍が沢山並んでいるのに驚きました。観光バスでソウルの夜景を見学しホストファミリーの家で3人一緒に泊まりました。ご夫婦とも日本語の勉強をしておられ、テレビでもNHKの放送を見ておられます。21日の日曜日は教会礼拝に参席、午後商店街で買い物。その後韓国伝統芸術の舞台公演の観覧は素晴らしかったです。とりわけ3種類の琴の演奏はその奏法も違ってとてもよい勉強になりました。22日は朝食後直ぐ従軍慰安婦施設(ナヌメジブ)訪問、広州の京畿道まで雪道を3時間、チェーンなしの車で徐行運転です。ナヌメジブ訪問は日本人として心痛みました。昼食は始めて口にした蕎麦の餃子。3時よりWCF(平和団体)と5時まで「バーバラ・レイノルズとWFCの歴史」について紹介、「平和」について話し合いました。夕食後KAC(Korean Anabaptist Center)の事務所を訪問し、4月に行われる韓国PAXの打ち合わせを致しました。23日早朝ホストファミリーの金さんに仁川空港まで送って貰いました。

今回の旅は短いけれど大変有意義でした。私の家を訪れた中学生達も買い物に付き合ってくれ、家族とも会えて国際交流の輪が広がり、とても嬉しかったです。

終わりに美味しい朝食と寝室を準備してくださったホストファミリーに感謝いたします。

ワールド・フレンドシップ・センター

翻訳グループ 畑本ひさの



翻訳クラス

WFCの翻訳グループは発足しておよそ15年になります。第2、4の木曜日の1時半から3時半まで活動を行っております。

私達はこれまでに様々な作品を翻訳して参りました。その中には、被爆者の方のお話や絵本、バーバラ・レイノルズさんについて、平和教育についての話、また広島平和カレンダーなどがあります。数冊の本も訳しましたが難しく数年を要した物もありました。それは「中国人被爆者・癒えない痛苦」(広島に強制連行され獄中被爆をした中国人の話)、「紙碑」(広島むつみ園の72人の被爆者の被爆体験や被爆後の生活や家族への思い)、「流灯」(原爆で国民学校教師や子供を失った肉親の手記集)、「広島の子」(WFCの理事長の森下先生他の方による被爆体験記)などです。

活動の方法は、各メンバーに翻訳すべきページを振り分けておき、順番に家で英訳したものをプリントアウトしてきます。クラスでは日本語と英語の両方を読み上げてみんなでチェックし話し合い、先生である館長の指導と助言を受けより良い英文に仕上げます。彼はより

適切な英語表現に直して下さったり、的をえたコメントをして下さり、私たちの活動には必要不可欠な存在です。

今手がけているものは「いしぶみ」です。これは被爆死した広島二中の生徒の家族がつづったものです。あと少しで完成しますが、そうしますと、いつものようにオハイオ州のウィルミントン大学のヒロシマ・ナガサキ記念文庫に送ります。私達のボランティアワークは目立たないささやかなものですが、多くの貴重なお話を世界中に紹介できることを嬉しく思っておりますし、これが少しでも世界平和に役に立つことを望んでおります。いつも私達の活動に多くの手助けしてくださっているWFCの館長であられるドンとポーリーンに深く感謝いたします。



韓国 PAX チームとの合唱

その他の訃報

森河さん

センターの家主の森河さんが、数ヶ月の入院後2月17日に他界されました。90歳でなくなる数年前から記憶がはっきりしなくなっておられ、その上いくつかの合併症も併発し酸素吸入を受けていました。しかし最後は安らかになくなられたそうです。葬儀には森下理事長をはじめドン、ポーリンと数名の理事が出席。センターからお花を贈りました。参列者の多い立派な葬儀でした。

マリー・エバソール

もう一つ、マリー・エバソールの死去もお伝えしなければなりません。1989年、夫のジョンとともに短期間ではありましたが、臨時館長を勤めました。さらに、アメリカに帰国後は友愛の発送作業などで、アメリカ委員会を手伝ってくれました。マリーはティンバークレスト老人ホームの認知症病棟に、この数年間入所していました。ジョンは癌で既に他界しています。彼らはいつまでも WFC のメンバーの心に残ることでしょう。今のところ彼女の訃報についてわかっているのはこれだけです。

2007年3月14日 広島のおい出

スタン・ロバーツ

バージニア州

ウィリアムズバーグ(ニューヨーク市経由)

すばらしい国日本に到着してほぼ 2 週間過ぎ、あと 1 週間を残している。地理的理由から広島を旅程の中ほどに入れた。そのことで「どうして?」「気分がふさいでしまうだろう。」と驚いた人も中にはいた。私は確信が持てないままに、いくらかの動揺を覚えながら、先日新幹線から降りたとき、背中のリュックは家族への土産で重く、加えてこの美しい町の悲劇の歴史の重苦しさに心はずでに沈み始めていた。

昨日一日平和公園と平和記念資料館を見てまわった。この一日は、結果的にその日のハイライトになったのだが、被爆者の松島さんとの出会いで始まった。彼はあの恐怖の朝、一時間目の数学の教室に座っていたそうだ。彼は当時 16 歳の健康な少年で(小柄ではあったが)、爆心地から約 1.5km の学校で勉強していた。爆風の衝撃にもかかわらず軽い怪我だけですんだ。そして町から逃げた。このことを彼は今でも恥じている。田舎にいる母のもとに

帰ろうとしたこの決断が、苦しい放射能の影響から彼を救ったのだ。驚くべき話。驚くべき人。本当の被爆者。

アメリカで、「広島はまったく消えてしまった。証拠写真により”事実”のその説明には信憑性がある」と教わった。被爆者の松島さんの話、それに続く平和公園、平和記念資料館(とてもよく保存されていて多すぎるほどの情報量であったが)が苦悩や深い苦しみを私に気付かせた。私は戦争擁護論者ではない。アメリカが日本の主要都市を無差別に爆弾で焼き尽くしたことは非倫理的だと思っている。しかし、原子爆弾の威力はあまりに大きく、多くの後遺症(主に放射能によるもの)はたとえ可能だとしても治療することは本当に難しい。日本人がなん世代にもわたってこのことで苦しむのを私たちは知っていたのだろうか? 体内被爆者は生まれながらに恐ろしい障害を持っていた。何年かたって白血病やその他のガンを発症した被爆者はそのことが理解できなかっただろう。それぞれの歴史を持つ家族が完全に消えてしまった。

こんなことは間違っている。悲しいことに、今日核戦争がひとたび起これば、ぞっとする皮肉であるが、人類は絶滅するだろう。もし私の印象を聞かれれば、相手がどう思おうと自分の印象を話そうと思う。

最後に、ベッドと朝食などドンとポーリンの手厚いもてなしに感謝します。ありがとう。ありがとう。ありがとう。アリガトウゴザイマシタ。

友愛ボランティア

翻訳：山下美枝子 山根美智子

平本隆子 平岡佐知子 木戸マサコ

畑本ひさの 吉村修子

編集：英語版 Don Hess 日本語版栗原尚美